

レマン湖のほとりで

—— I L O 専門家会議へ——

「ナイーブ」というと、日本では「繊細な」という肯定的な感じが強いが、英語の「ナイーブ」は「うぶな」、「青臭い」、「無知な」、「無神経な」という否定的なニュアンスが強い。辞書を引くと foolishly simple, unsophisticated とある。「ナイーブ」といわれても喜んではいられない。

なに、心配には及びません。法律の専門家の立場から、日本法の現状と個人としての意見を述べてもらえばいいんですから。

日経連の職員がごく気軽な調子で述べ、討議用の分厚い資料をわたしによこした。

当時は留学経験のある労働関係の弁護士は少なかった。わたしは経営法曹のメンバーだったが、名ばかりで活動歴はゼロ。本来ならベテランのメンバーが参加するが、英語ができる人材が不足で、わたしにお呼びがかかったらしい。

「ジュネーブは初めてだし、I L O（国際労働機関）を見るのも経験になるか」と気安く引き受けたのが間違いだった。

その当時、会社が倒産した場合、1部の債権者が優先的に支払いを受け、従業員の未払い賃金は後回しになる国が多かった。従業員が優先的に支払いを受ければ、金融機関（債権者）は会社に融資するのに躊躇するだろう。かといって、金融機関の優先権を無制限に認めては、従業員は路頭に迷う。開発途上国では、特に深刻な問題となっていた。

そこで I L O は、今後の法制を検討するため、各国の法律専門家を集め会議を主催した。使用者、従業員、政府の各代表が出席するが、専門家は個人としての意見を述べることになっていた。

—— レマン湖のほとりで——

3月の中旬、わたしはジュネーブに飛び、レマン湖畔のノガ・ヒルトンに泊まった。

チェックインするとき驚いたのは、禁煙フロアか喫煙フロアかどちらにするかを尋ねられたことだった。

当時、日本ではまだ禁煙運動も盛んではなく、ホテルでも禁煙室さえなかった。

それなのにここでは「禁煙室」はもとより「禁煙フロア」がある。

禁煙フロアは階全体が禁煙なので、廊下を歩いてもタバコの臭いはしない。

わたしはもちろん禁煙フロアの禁煙室を取ったが、気のせいか空気がうまく妙に納得したものだった。

ジュネーブはスイスの南西に位置し、フランスの国境に近い国際都市である。青く美しいレマン湖を中心に広がる国際都市で、GATTやILLOなど国際機関が200あまり、人口の半分以上は外国人といわれる。

到着した日、レマン湖には靄がかかっていた。空から薄日がもれ、湖面はわずかに光り、カーン、カーンと鐘の音が湖面に響きわたる。人影も少ない日曜の朝であった。

ギヨーオ、ギヨーオとカモメが騒ぐ。対岸の緩やかな丘陵も靄のせいで墨絵のよう。

白鳥が一羽ゆっくりと視界を横切っていく。

突然、湖中の大噴水が40～50メートルほどの高さに吹き上げると、風に流され大きな霧の壁ができる。天候のよい時はこの大噴水は140メートルまで吹き上がるという。

青い空、湖、緑のプロムナード、レマン湖を渡る風、それに花壇が国際都市ジュネーブのセールスポイント。旧市街と新市街を結ぶモン・ブラン橋には赤、青、黄の色とりどりの万国旗が風に揺らめく。

そういえば、わたしが以前勤めていたB&M法律事務所のジュネーブオフィスが、レマン湖畔にあったはずだ。美しい湖を望む光あふれるオフィスで仕事をし、昼休みはテニスで汗を流した後、午後の仕事にとりかかる。そういう噂だった。

そんな風に一生を過ごせたら、と若い時は思ったものだが、とっくに諦めた。相変わらずあくせくと仕事に追われる日々を送っている。

—食えない弁護士と腰巾着—

1日目の顔合わせには80名近くの専門家が参加した。

顔合わせが終わった後、中南米某国の代表が「使用者側の専門家はちょっと集まってくれ」と招集をかけた。

「何だろう?」といぶかりながら参加すると、「明日からの全体会議に備えて、使用者側の

戦略を練って意見を統一しておきたい。個人個人で意見を発表すると、労働者側につけ込まれる」という。

この会議に初めて駆り出されたわたしと違い、彼は専門家会議に場慣れしている様子だった。年の頃は60代、葉巻をくゆらしながらどんより濁った目でじろりと一同を見渡す。かなりの肥満体で、大声で喋ると二重アゴ（ダブルチン）が波立つのが可笑しい。

背広もわたしなどとは違い、極上の仕立て風。某国では成功している使用者側弁護士なのだろう。

他の専門家は20名ほど。皆黙っている。ただ一人、側近らしい小柄な弁護士が、ダブルチンが喋る度に盛んに頷いている。ヨーロッパの国からの代表らしいが、まるで腰巾着こしぎんちやくみたいな奴だ。

「個人の資格で参加しているのに、おかしい」とわたしは思ったが、とりあえず黙っていた。図にのってダブルチンは吠えまくる。

労働者側は未払い賃金債権を優先支払いするよう ILO に勧告するに決まっている。われわれは結束してこれを阻止しなければならない。

「現在の法制度で各国とも特に問題はない」という線で、われわれの意見を統一したい。

わたしは国際会議の裏工作には全く不慣れだが、誰も発言しないで思い切っては発言した。われわれは確かに使用者側の代表だが、あくまでも法律の専門家として個人として意見をいうことになっているはずだ。

話の途中で、ダブルチンが遮る。

ブファ フア フアハハハ…。日本の若い人、労使関係はそんなに甘いもんじゃない。

—孤立無援のわたし—

彼はいかにも教え諭すといった風にわたしを説得しにかかる。

二重アゴを震わせながら笑う様は何とも可笑しい。食えないやつだ。国際会議でよく見られる海千山千のタイプ。たいていは権力欲や榮誉欲の塊である。使用者側の代表といつても、

好きになれない。

密室で意見を一本化するなんて、そんなべらぼうなことがあるか。若いからといって見損なうんじゃない。

べらんめえ調で啖呵を切りたいところだが、英語での喧嘩となると無理筋。どうしても控え目になる。

なるほどわれわれは使用者の代表だが、専門家として個人の意見を述べるためにこの会議に出席している。日本の制度に関する意見を述べるのに、わたしは他人のアドバイスを必要としない。「日本の制度が従業員の保護に欠ける点がある」という意見を変える気はさらさらない。

そういうとダブルチンは、わたしを抑え込もうとする。

お前さんはまだまだ若い。労使関係は基本的に敵対関係なんだ。そんな甘っちょろい考えが健全な労使関係をだめにするんだ。

とまあこんな調子である。例の腰巾着が、盛んに「うんうん」と合いの手を入れる。バカな奴だ。専門家のくせにプロの矜持もないのか。

とりあえずその日は遅くなつたので準備会は打ち切り、翌朝、使用者側は再び集まることになった。わたしは反対したが、孤立無援。ダブルチンに簡単に押し切られてしまった。

——日本流 感懃無礼——

翌朝は不愉快だからわたしは準備会には出ず、控え室で全体会議の資料に目を通していた。

すると例の腰巾着がやってきて「みんな集まっているから早く来てくれ」と催促にきた。

「使用者側だけが集まって、事前に意見を統一する必要性を認めない。」わたしは持論を繰り返し、腰巾着をはねつけた。

彼が帰つていってしばらくすると、今度は見知らぬ日本人がやってきた。心配して様子を見に来た風である。名字を名乗ったが、名刺もよこさないので日本政府の職員か、ILOの職員か身元も分からない。ただ、彼はわたしの言動は逐一知っているらしい。

矢部さん。使用者側の専門家はみんな集まっていますよ。出られたらどうですか？

わたしは拒否。

まあまあそういうわざに。みなさん出席しておられるんですから。日本の代表だけが準備会に出ないのはマズイので。

わたしは再度拒否。

だけどあれは非公式で任意のミーティングでしょう。そういうやり方で意見統一することは討議の趣旨に反し、わたしは反対です。

だが、くだんの日本人は「それではわたしが困るので」と何度も懇願する。

結局、彼は自分の意見をわたしに押し付けているのだ。わたしに意見を変え、大勢に従えといっているのだ。わたしの意見の是非は二の次である。

だが、彼にはそんな意識はない。もともと彼には個人の意見がない。上への報告ばかりを優先し、もめ事を嫌う。ゴタゴタしては、上から叱責される。恐らくそんなところだろう。

だが、やはりわたしも日本人だった。ついに摔倒され、準備会に大幅に遅れて出席した。

準備会では例のダブルチンが一人で持論を繰り返し、その度に腰巾着が「もっとも。もっとも。」とわざとらしく頷く。専門家のくせに自分の意見もないらしい。

その後、ダブルチンは自分の意見をとうとうと述べて散会。意思統一がされたのかされないのか、はっきりしないままに終わった。

—ナイーブな日本人—

その後2日間にわたった全体会議で、わたしは準備会の打ち合わせを無視し、自分の意見を発表した。

労働者側の専門家もバランスのとれた意見を述べ、ダブルチンの危惧したことにはならなかった。

今振り返ればわたしもナイーブだった。

弁護士に形だけ出席して貰い、帰国したらレポートを提出してもらえばそれでいい。

要するに、適当にお茶を濁したやうつけ仕事で十分だったのだ。何だかんだと自分の意見をいう弁護士は困る。そんな事情も知らず、ノコノコと出かけたわたしも馬鹿だった。

だが、おとなしい専門家ばかりが出席し続けたら、日本人は「物言わぬお客様」で終わってしまう。自分を主張しない者は、そもそも参加する意味がない。それが国際基準だろうに。話を持ってきた日経連の職員も、現地の日本人も国際感覚ゼロ。何ともナイーブな話である。

1980年代の話だが、わたしには日本流(官庁流?)処理への強烈な不信感が残った。